



災い転じて

〈新潟県〉

佐藤 量子 57歳

私は、半年前に副看護部長としての今の病院に入職した。小さな田舎の病院で22年間過ごしてきた私にとって、どこか居場所がない日々を過ごしていた。

あの日も慌しい外来で、病院長が突然「佐藤君、さっきの余震で君のいた〇〇病院が大変だ。入院患者は全員避難で、当院は23人を受け入れることにしたからすぐ準備を頼むよ。君の家は大丈夫か？」

3日前の10月23日、中越地震で私の町もダメージを受けてはいたが、今朝も以前の職場であった病院の前を通り、寸断された通勤路を迂回して出勤して来たばかりだった。1時間ほど前に少し大きな揺れを感じたが、毎日余震続きで気にも留めていなかった。急いで講堂にベッドを準備して患

者さまの到着を待っていると、県内外から応援に来た救急車が続々と到着した。最初に搬送された見覚えのある老女は、毛布に包まり震えている。「△△さん、怖かったね。もう大丈夫よ。お部屋を用意しておいたからゆっくり休んで」。手を握ると「佐藤さんだねか。先に来て待っていてくれたんだね。ありがとう、ありがとう」と、泣きながら手を握り返してくれた。

「半年も前からここに来て待っていたー」。私も胸が熱くなった。

講堂には23人の見慣れた患者さまが横になっている。カルテが届いていないことから、どれほどの被害であったかがうかがえる。私は、仮カルテに名前を書いて「□□さん、朝注射してきたよね。お昼まだ食べてないでしょう。気分

悪くないかしら。血糖値を調べてすぐ食べられるものを用意しますね」

そこに副院長が回診に来て「佐藤君、何でカルテもないのにそんなことが分かるんだね」。不思議そうに私の顔をのぞき込んで尋ねた。

「この患者さまたちは、半年前まで私が勤務していた病院の患者さまです。〇〇病院のナースはこれくらいみんな分かりますよ」

すると副院長は、「あんたたちはいい看護師さんに看てもらって幸せだね。今日は、私が診させてもらいますよ」

この日以来、この病院に小さな居場所ができたような気がした。